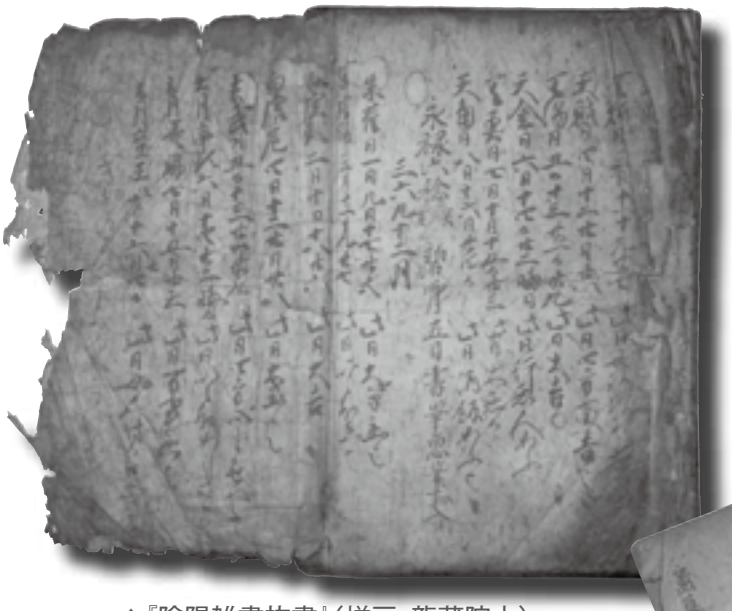
日本の地方文化を見直す 大きな発見



▲『陰陽雑書抜書』（楢戸・龍蔵院本）

『簠簋傳』（只見・吉祥院本）▶

只見町のホウインの家の蔵書調査によって、戦国時代の陰陽道の写本が発見されました。吉祥院本『簠簋傳』は元亀三年（一五七二）の書き入れがあり、龍蔵院本『陰陽雑書抜書』は永禄六年（一五六三）の奥書があります。いずれも全国で三番目に古い写本であることが判明しました。陰陽道とは、暦や方角の吉凶を判断する呪術の宗教体系で、これらの陰陽道書で、農作業や家建て・井戸掘りなどの吉日を判断しました。

▽只見町のホウイン

山で修行してみずから神仏に近づくのが山伏（修験者）であり、その宗教を修験道といいます。山伏は、人々の身近な願いに応じるために、村里にも住みました。会津地方では、里に住む山伏（里修験）をホウイン（法印）と呼びました。ホウインは、修験道の宗教者として祈禱・占い・まじない・病気治療などを行い、村人に手習いを教え、宗教者であるとともに、地域の文化人・知識人でもありました。

江戸時代の只見町域には六か院のホウインがありました。その住宅は農家の建物でしたが、奥の間には寺院の内部のような須弥壇があり、不動明王が祭られ、護摩祈禱が行われました。

修験道は明治初期に廃止されましたが、只見町域では、ホウインの住宅が残され、不動尊の祭りが続けられました。そのため、楢戸の龍蔵院・只見字新町の吉祥院では書物もそのまま保存されてきました。

▽里修験の蔵書調査

只見町史編さん事業によりホウインであった家の調査が行われ、龍蔵院（山崎行弘氏宅）と吉祥院（五十嵐英氏宅）の文書や書物が目録化されました。吉祥院については、『只見町史第1巻　通史編1』（平成十六年三月）に、「法印・吉祥院の蔵書」として記述されました。町史編さん事業が終了した後、平成十六年八月に龍蔵院に多量の書物があることがわかり、東洋大学講師久野俊彦氏・国立歴史民俗博物館准教授小池淳一氏が、龍蔵院・吉祥院の蔵書調査を開始しました。

平成十八年には、国立歴史民俗博物館を中心とした共同研究の「唱導研究の比較研究班」が只見町を訪れ、龍蔵院・吉祥院の書物のうち、特に重要な十数点の写本を精査しました。その結果、それらは戦国時代の写本であると推測され、今後精密な調査にもとづいた確認作業が必要であることがわかりました。

平成二十年には、龍蔵院の書物と文書・版木等が、山崎家から只見町に寄贈になりました。平成二十一年まで久野氏が龍蔵院の書物・文書の写真撮影と書誌学的調査を行い、平成二十二年三月に『修験龍蔵院聖教典籍文書類目録』として、国立歴史民俗博物館から発刊されました。また同時に、戦国時代の重要な写本である吉祥院本『簠簋傳』と龍蔵院本『陰陽雑書抜書』の二点は、全ページ写真版で出版されました（左写真）。

▲只見町のホウイン宅から見つかった蔵書をもとに刊行された本

只見町のホウイン（法印）の家に戦国時代の書物

只見・五十嵐 英氏
（旧吉祥院）

役に立って良かった。不動様のところに大切に保存しておいた。仕事を退職してから、目を通すようになった。貴重な書物とは思っていたが、このように取り上げられ、嬉しく思う。

楢戸・山崎 行弘氏
（旧龍蔵院）

ずっと手をつけずに、そのまま保存しておいて良かった。内容的に難しく、理解できない部分もあるが、時間があるとき目を通している。このように世に出てありがたい。

久野 俊彦氏
（東洋大学講師）

今回発見された『陰陽雑書抜書』は、戦国時代の農村の田植えや種蒔きなどの農業をはじめ、生活行動の日の吉凶を教えてくれる書物です。これは現在の『暦本』（農事暦）に書かれている日の吉凶の源流になるものです。

龍蔵院の書物（聖教典籍）は、修験道・呪術・仏教・神道・陰陽道などの諸宗教・諸宗派にわたり、和歌・物語などの文学作品も含んでいます。その中の『伊勢物語註抜書』も戦国時代の写本であり、山間地に存在する写本として、文学史では驚くべき発見です。これらには確実に読まれた跡があります。村落で活動する修験者の宗教・文化活動を具体的に知ることができる重要な資料です。京都から遠く離れた山間地に、こうした優れた豊かな文化が根付いていたことは、日本の地方文化を見直すことになる大きな発見です。この書物が時代を越えて一括して伝存されてきたのは、修験者がこの書物を参照して活動していたからです。大切に残そうという強い意思を持っていた代々のホウインサマに敬意を表したいと思います。

小池 淳一氏
（国立歴史民俗博物館准教授）

この度のホウイン（法印）関係の文書や聖教類の調査では、中世にさかのぼる陰陽道や仏教の貴重な写本が数多く確認されました。このことは只見町域の代々のホウインたちの活動の幅の広さと伝統の厚さとを示すものと言えます。

ホウインたちは、修験道はもちろん、陰陽道や仏教、神道などの書物や師匠から伝授された知識をさまざまな機会に村の人びとにも伝え、また村の人びともホウインを頼りに生活を営んでいたのでしょう。ホウインは明治初めの神仏分離によって、その姿を消してしまいましたが、かつては地域の知識人として活躍していたことがわかります。ホウインの活動は、現代でいうならば文化センターのような役割を果たしていたといえるでしょう。今回の史料群の整理と位置づけからは、奥会津の宗教文化の豊かさ―修験道や仏教に限らないさまざまな知識の展開の姿―が見えてきました。これらを貴重な文化財として総合的に後世に伝えていく必要があります。私たちも会津のホウインの調査をより広範囲にわたってさまざまな角度から継続していきたいと思っています。